

補習校だより

2017年3月27日発行

ノウルーズおめでとうございます。イランの新年が明けました。今年は太陽が春分点を通過したのが3月20日の13時58分でした。毎年、新年を迎える時間が変わるの面白いですね。

この時期は新年の挨拶廻りや、旅行をしたりしてスィーズダベダル(13日目のピクニック)まで春の訪れを満喫します。

イランの新年が明けると、補習校での授業も残すところ5回になります。少ない時間ですが集中して学習し、修了式の発表に成果を発揮できるようにがんばりましょう。



今月(ファルヴァルディン月)の予定

3月30日(木)はノウルーズの為、休校です。

第22回目授業 4月6日(木) 通常授業

第23回目授業 4月13日(木) 通常授業

第24回目授業 4月20日(木) 通常授業

☆☆☆作品紹介☆☆☆

3・4年生クラス

『食べ物のひみつ』より

【3年 田中 らやん】

「魚」

うちの魚の食べ方をせつめいします。やくか、油であげて食べます。

やく時は、魚にしおをふって、日本酒を少しかけておきます。それからやくと、おいしいです。

あげる場合は、魚にしおとこしょうをして、小麦こ、玉子、パンこをつけて、たっぷりの油であげます。

魚はこのほかにも、さしみや、か工された食品など、食べられるきかいはたくさんあります。



【3年 かとう ルミナ】

「すがたをかえる牛にゆう」

牛にゆうは、えいようもほうふで、そのままのんでもだいじょうぶです。また、牛にゆうからか工される食品も多いです。

そのしゅるいは、ヨーグルト・チーズ・バター・アイスクリーム・全ふんに
ゆう・れんにゆうなど色いろあります。

その中のヨーグルトやチーズは、にゅうさんきんというきんをつかい、はっこうさせて作ります。でも、チーズは、青かびや白かびの力をつかうものもあります。

しかし、牛にゆうは、食品以外にもか工されるものもあります。

それは、牛にゆうの中にふくまれているタンパクしつのせい分のカゼインをつかいます。そうすると、シルクのようなせんいになったり、いんかんや洋服のボタンやピアノのけんばんなどのプラスチックにもなります。

食品以外にも、すがたをかえる牛にゆうは、すごいと思いました。



コラム

今年度の補習校だよりでは補習校に在籍していた方々からのメッセージやコラムを募集して掲載してきました。今回は、2年前まで補習校に在籍していた加賀山咲菜さんと昨年度、補習校の補助教員をして下さっていた宗像花草さんから送っていただいたコラムを掲載します。

四つの学校で学んだこと

小6 加賀山咲菜

ここでは、イランの学校、補習校、つばさ小、宮原小の四つの小学校を体験して、気がついたことを書きたいと思います。

まずイランの学校は、とにかく休みの日が多かったです。空気が汚れていたり、祝日の日が続いていたり理由で五連休も少なくありませんでした。先生も思ったより厳しくありませんでした。例えば、体育の授業で縄跳びをするときは「好きな場所で自由に飛んで下さいね」と、いわれていました。授業では、みんな積極的に手を挙げていました。いつも「!من!من!من!」（はい!はい!はい!）という声が絶えませんでした。イランの学校の子たちは周りを気にせず自由でした。

次に補習校は、漢字を習いたいハーフの子や、イランの子が集まった学校でした。ハーフ同士イランの子同士でかたまらずに仲良く出来ることは、すごいことだと思います。

それに、みんな勉強を嫌がらずに楽しく学んでいました。

私は、「補習校が嫌だ、行きたくない」などと思うことはありませんでした。むしろ、「早く補習校に行きたいな」と思っていました。

人数が少なかったけど、なんでも力を合わせて取り組んでいました。

補習校の子たちは団結力が強かったです。

次につばさ小は（日本の学校）、発言や行動が大人っぽい子が多かったです。

そのためか、ケンカが少なかったです。

テレビでは、アニメを見る人よりバラエティー番組やドラマを見る人の方が圧倒的に多いと感じました。

授業では、イランの学校の子に比べて手を挙げて発表する子が少なかったです。

そして、私が一番驚いたのは給食です。サラダがとても美味しかったです。

学校に給食を作る人がいて、朝早くから約1000人分の給食を作ると聞いてすごいと思いました。

つばさ小の子たちは先のことを考えて行動ができていました。

最後に宮原小は、子供らしく毎日外で遊んでいる子が多かったです。

男子はサッカーやバスケットボールをしたり、女子は縄跳びや鬼ごっこをしたりして遊んでいました。

図書室はつばさ小よりも広かったです。本の数も多かったです。

けれど、言葉遣いが悪かったです。先生にも平気でタメ口を使ったり、友達が悪口を言ったり、悪口を言われても折れない心を持っている子が多くいました。ちょっとしたことで泣かないで、しっかり自分の意見を言える人が多かったです。

宮原小の子は元気で、自分の意見をしっかり持っていました。

私はこの四つの学校を体験してそれぞれの学校の悪いところよりも良いところを見つけた方が、毎日が楽しくなるということを学びました。日本に来て一番悲しかったのは友達と離れてしまったことです。

イランのエイデを迎えるころには卒業して中学生になります。これからもどんどん新しいことに挑戦して楽しい中学校生活にしたいです。

卒業おめでとう



こころのもちよう

宗像花草

青い空、のんびりとした空気、緑溢れる静かな通り、春の訪れを拒むように雪で覆われたトーチャール… 今、イランから日本に帰国する直前に撮ったノールーズのテヘランの写真を眺めています。またノールーズの季節がやって来ましたね、みなさんお元気ですか。

日本は、テヘランの日常を何倍も早送りしたように慌ただしく、まるでプログラムされたシステムのように。例えば、回転寿司店では、人数を告げるのも、着席注文するのもパネルかた。注文した寿司は、機械のペースでどんどんやって来ては「早く取って、取ってよ！」と猛アピール。お会計の際に店員と初めて会話…、と言っても、呪文のようにお皿を数え、客と目を合わせる様子はない。そして最後に、「アリガトウゴザイマシタ」と会釈。

「そうだった、これが日本だった。」

気づけば私も時間や仕事に追われる日々。自分に余裕がないから、他人に思いやりがない。こころあることばを選べない。自分本位に考え行動してしまう。夫も日常に忙殺され、全く余裕がない。帰国後数ヶ月して、「私たち確実にこころを失っている」と気づいた時、そんな私たちのこころはさらに沈んでしまったのです。

やはりそこは温かい街でした。世界一のおもてなし、こころのこもった食事、終わらないおしゃべり、伝統楽器の音色、覆いに囲まれての楽しいテニス、甘〜いデザート、変わらない友だちとパートナー、成長した子どもたち… そう、私たち夫婦は夏休みにテヘランに引き寄せられるように帰ったのです。何もしませんでした。ただ、大切な人たちと一緒に過ごしました。こころが解放され、じんわりと満たされていくのを感じました。

イランでの生活は大変なことも多く、良いことや良い人との出会いばかりではないはずです。しかし、イランにクラス知り合いのこころのなんと逞しく温かいことでしょう。みなさんのこころの豊かさも、お子さんたちにしっかりと受け継がれているのではないのでしょうか。それは、そんな日イダブルの子どもたちが将来誇れる強みになると信じています。

嬉しいことに、日本で暮らす補習校卒業生の鈴木昇一君に会いました。忙しい年末のアルバイトの合間に変わらぬ笑顔でふらっと現れた昇一くんと、一緒にお昼を食べました。イランで食べるようなこころのこもった食事ではありませんでしたが。それでも、優しさという強さがさらに増した昇一君が目の前にいる（しかもそこは神奈川県）という嬉しい違和感に、私のこころは弾みました。

嬉しさ余って矢継ぎ早に質問をしてしまうと、昇一君はやや戸惑っている様子。すると、昇一くんはゆっくりことばをつないで言いました。「僕は、日本語は使えるけれど、日本の文化や習慣をしっかりと理解できていないかもしれない。それが原因で相手に失礼のないようにことばを選んで話すようにしているので、時間がかかるのです」と。その後は、お互いの近況や音楽について楽しい話をたくさんしました。レジの前で、「いえ、支払います」と、昇一くんがイラン流に繰り返したのは言うまでもありません。

昇一君と別れてからの車中で、素敵な時間を過ごせた余韻に浸りながらも、反省しました。いいえ、猛省しました。「日本のせい、日本の人たちのせい、日本の忙しさのせい…」それは、自分が思い描く居場所を日本で容易に見出せないことへのただの言い訳。何かのせいでできるほど、帰国後自分は努力をしたのだろうか。「イランだからね…」と言ってあきらめていた頃の自分のことも思い出して、相変わらずな自分にごっかりしさらに胸が痛む。昇一君はというと、過去・現在そしておそらく未来の自分を取り巻く環境を客観的に見つめて、行動しているではないか。親元を離れたばかりのまだ10代の青年は、現在進行形でここを鍛えている。二倍以上も生きてきた成人は、いつからかこころの鍛錬を怠っていた。全ては、こころのモチようなの。

そう、全てはこころのモチようなのです。



編集後記

ノウルーズの初めから降り続いていた雨があがり、6日目の今日は爽やかに晴れています。降水量の少ないイランで雨はめぐみ、雨に濡れても乾燥した気候ですぐに乾くせいか傘をいちいち差す人は少ないです。

雨上がりの街路樹は太陽に照らされてキラキラと輝いています。イランで水に濡れても「Roushanai」だと笑って答えた人がいたのを思い出しました。どうやら水が明るさをもたらすという意味に使っていたようです。雨や水から連想することが、ところ変われば随分違うものだと思います。

イラン暦 1396 年も皆様にとって輝かしいものになる様お祈りいたします。

(鈴木淳子)